

第 19 回(2009. 7.13 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「7 月は土用丑の日」

この時期、土用の「丑の日」にウナギを食べる習慣がある。旧暦では十干と十二支(干支)を組み合わせて年、月、日、時、方角などを表していたが、夏の土用の丑にあたる日にウナギを食べる習慣は、江戸時代にウナギ屋から相談を受けた平賀源内(1728～1780)が、宣伝用の看板に「本日、土用の丑の日」と書いたら大変繁盛したからだといわれている。仏教の伝来と共に獣肉を嫌ってきた日本人は、滋養のあるウナギは夏バテに効く食べ物として、江戸時代から庶民によく食べられるようになったという。

土用丑の日のほかにも、土用の虫干しや、土用の梅干しなどという言葉をよく聞くが、風水などで使われる陰陽道五行説では、立夏の前 18 日間を春の土用、立秋の前 18 日間を夏の土用というように、春夏秋冬それぞれの終わりの約 18 日間を土用といった。現在では夏の土用だけが一般に良く知られているが、夏の土用丑の日にウナギを食べる習慣があるからだろう。今年は 7 月 19 日と 31 日の 2 回ある。

現在、日本人が一年間に食べるウナギの量はおよそ 15 万トンで、数に直すとおよそ 7 億 5 千万匹だそうである。これは、まだ離乳食の赤ん坊から、生活習慣病や長期治療で入院している老人まで含めて、1 人あたり年間 6 匹を食べている計算になる。関東と関西で、料理の方法が違っているのはよく知られている。関東は頭を取って白焼きにして蒸してから蒲焼きにするが、関西では頭を付けたまま素焼きにして、すぐタレを付けて焼く。また、関東は背開き、関西は腹開きにするが、江戸を中心とした関東では、武士が不始末を犯して切腹することから、腹を切ることを嫌ったという。その点、商人の町である大阪を中心とした関西では、開きやすい腹から切るのはあまり抵抗がなかったのかもしれない。

ウナギは、鮭と反対に海で生まれて川で育つといわれている。海で捕れるウナギの稚魚は、シラスウナギといって珍重されるが、その生態は未だに謎の多い魚である。ウナギは、若干の皮膚呼吸ができるから、水から出ても皮膚が濡れていればかなり長時間生きていられるが、それは皮膚が粘液で守られているからで、したがって掴みにくいので、そこからのりくらしとしてなかなか本心を見せない人を、「(ウナギのような)つかみどころがないやつ」という。まさに諸君のような人をいう。その点、この雲竹齋先生は虚心坦懐、誠心誠意の人だから違う。百歩譲っても、まあドジョウくらいなものか。

丑といえば、古代の陰陽道で時刻や方角を十二支で表したが、丑の刻とは午前 1 時から 3 時をいう。「丑の刻参り」という儀式がある。真夜中に白い装束をまとい、頭の上にローソクを立て、神社の境内にある巨木に藁人形を五寸釘で打ち込むという「呪いの儀式」である。そもそも、丑の刻参りは人間が生きながらにして鬼になる儀式だった。また、丑寅の方角(北東)は、古来より鬼が住む方角とされており、丑の刻に鬼がでてくるといわれていたから、この儀式が丑の刻に行われるようになったと思われる。丑の刻参りで有名なのは京都の貴船神社だが、ここは桓武(かんむ)天皇(第 50 代、在位 781～806)が鬼門封じのために建立した神社で、古くから呪詛の神とされていた。

丑の刻参りの原型は、裏・平家物語にある「宇治の橋姫」伝説だといわれている。嵯峨(さが)天皇(第 52 代、在位 809～823)の頃、嫉妬深い公家の娘が、貴船神社に 7 日間こもり、鬼になって浮気した男や相手の女を取り殺したいと願ったところ、「長い髪を五つに分けて松ヤニで固めて角をつくり、顔に朱(赤色顔料)をさして、身に丹(に = 赤褐色で硫化水銀の鉱物)を塗って松明を口

にくわえ、宇治の河原で 37 日水に浸れ」とご宣託があった。娘がそのとおりにすると願いがなかった、という話である。この物語が謡曲の「鐵輪(かなわ)」に発展して、今日の「丑の刻参り」の形ができたという。

この物語は、京に住むある女が自分を捨てた男の後妻を妬み、貴船神社に丑の刻参りをすると、神社の神官が、「身に赤い衣をまとい、顔に丹を塗り、頭に鐵輪を乗せて三つの足に灯をともし、心に怒りをもてば、たちまち鬼神になるであろう」と、夢に現れた神のお告げをその女に伝える。一方、男の方は毎晩悪夢にうなされるので、有名な陰陽師の阿倍晴明に救いを求めた。阿倍晴明が茅で人形をつくり祈祷したところ、先妻が鬼になって現れて、人形に向かって恨み言をいい、後妻の人形を打ち、男をさらっていこうとするが、阿倍晴明の祈祷が勝って、やがて女は消えていく、という悲しい物語である。

藁人形に五寸釘を打ち込む形式になったのは、江戸時代ではないだろうかといわれているが、今でも貴船神社の奥深くの大木に、わら人形を打ち付けられているのが、たまに発見されるそうだ。浮気をしたり、女性を見くびったりしている男性諸君、もしかすると今夜にも君は

十二支の「丑」は、音が同じなので、動物に当てはめて「牛」の字を使っている。なぜ十二支のなかで牛が 2 番目になったのかには諸説あるが、そのひとつに、お釈迦様が呼んだときに真っ先に駆けつけたのは牛だったが、ネズミは牛の頭に乗っかってお釈迦様の前で牛の前に飛び降りたから、ネズミが 1 番で牛は 2 番になってしまったという話がある。

牛は古くから人類とかかりあいがあった。ヒンドゥ教のシバ神は、牛に乗っているというが、そこでヒンドゥ教徒は牛を神聖なものとして食べないことや、ギリシャ神話にある牛の頭を持ったミノタウルの悲しい物語などもよく知られている話である。わが国でも、学問の神様といわれた菅原道真が生まれたのは丑の年だというし、亡くなったのも丑の年だったといわれている。だから、菅原道真公を祀った天満宮には牛の像が奉納されているのである。

牛の餌は、主として牧草だが、強力な唇の部分で根ごと引き抜いて食べてしまい、草や根に挟まっている金属片だろうが何だろうと一緒に飲み込んでしまうから大変である。牛は反芻動物の一種だから、飲み込んでからゆっくり取り出して食べる習性がある。体内に四つの胃を持っていて、常に胃の内容物を循環させて、時間をかけて消化している。そこで、最初の胃の中に磁石をわざと飲み込ませて、金属片を一カ所に集めておいて、後でより強力な磁石を入れて取り出す、という作業をしている牧場もある。

現在、牛を識別するには、DNA 鑑定がもっとも進んでいる方法だが、簡単に識別するには「鼻紋」をとっておく方法がある。牛の鼻紋は人間の指紋と同じで、個体によって異なる。これで「御用！」となった牛泥棒がけっこういるのだ。そのため、拓本をとるように牛の鼻に墨を塗って紙を押しつけなければならない。そんなことをされても、牛は人権ならぬ牛権問題などと主張しないから牛は偉い。

牛は、平安の昔から高貴な人が乗る輿を牽く大切な動物でもあった。牛車(ぎっしゃ)という乗り物だが、当時から牛は食べるものではなかった。しかし、現在では人間生活にはなくてはならない食用動物となっている。ところが、今や世界中が狂牛病問題で揺れている。牛に無理矢理ビールを飲ませ高コレステロールの体にして、霜降り肉だなどとやっているからだ。また、鳥インフルエンザも流行している。昔から鶏卵ほど他の食料品に比べて値上げ幅が低い食料品はない。だから鶏は「オレをバカにするな」と怒っている。最近では豚インフルエンザも猛威をふるってきた。狂牛病問題もあって、牛肉より安価な豚肉が注目されている。だから豚も「牛並みに扱え」とブーブーいい始めた。牛や鶏や豚を早く太らせて出荷して儲けようなどと画策したりしている生産者や、生き物に感謝もしないで平気で食べている消費者も悪い。人類に対する動物の復讐が始まったのだ。なかには「だから自分は野菜しか食べない」というヤツがいる。何をバカなことをいうか！野菜(植物)だって生き物だ。